

六月も末、梅雨真っ盛りに珍しく雲一つ無い休日、僕は先日起こったとある事件の真相を確かめるべく、同じ文芸部でオカ研メンバーである藤枝の家に自転車を飛ばしていた。あの濃厚な藤枝が大河原先輩と壮絶な口喧嘩をしたあげく、終い目には手まで上げたと言うのだ。

確かに、最近の二人はどこかぎこちなかった。最近の彼女を知っている人には容易に想像がつく事かもしれないが、原因は彼女が我が子のように可愛がっている愛犬ココアにある。

もともと藤枝は凝り性で、一度好きになったらとことんまで追求しなければ気が済まない、いわゆるちよつとオタク気質な一面を持った少女だ。小説、漫画、映画、音楽……いろんなものに手を出しては、その時々藤枝を支配しているのはかならず何か一つの物事で、それに飽きるまであの子は決して周りに見向きしない。

そして、それは人間関係についても同じ事だった。これは山田さんに聞いた話だけど、藤枝の盲目的な愛情は一時期あの「日野啓一」に向けられていて、終い目には結婚まで仄めかしていたというのだから……一途と言えば聞こえは良いが、一般的なそれに比べるといささか度が過ぎていた。——しばらくすると落ち着いて、「物事には段取りがあるよね」なんて無邪気な笑顔で言っているのだけど。

そして、啓一くんへの愛情が落ち着いた藤枝が次にどっぴりハマったのが、彼女の両親が親戚から譲り受けたというオスのシェパード犬、ココアだ。

ココアが藤枝家に来て間もない頃、僕と鷹取先輩、そして大河原先輩の三人は一度だけ一緒に彼女の家に遊びに行ったことがある。藤枝はまだ赤ん坊のココアを抱きしめてまるで我が子のように盲目的な愛情を注いでいたが、当のココアには彼女の一方通行の愛情を受け入れる様子などまるで無かった。じたばたともがき苦しみ、なんとか脱出を試みようとして、ついには隙を見てなんとか藤枝を振り切ったが、真っ先に逃げ出した先がなんとあの大河原先輩の懐だった。

「おいこら、離れろクソ犬！」

大河原先輩がココアを押しつけようとするが、子犬は遊んで貰っているものだど勘違いして、先輩の腕にしきりにじゃれ噛みしていた。じゃれ噛みと言っても相手はまだ加減もよく分かっていない子犬で、先輩の腕には痛々しい歯形が刻み込まれていく。

「ご、ごめんなさい、大河原先輩！ほら、おいでココア！お肉だよ！」

藤枝が備え付けのビーフジャーキーを差し出すが、ココアは大河原先輩のお肉に夢中だった。

「はい、ほら、ココア！こっちだよ！ココアの大好きなお肉……こらっ、ココア！大河原先輩が困ってるでしょ！こっちに来なさい！ココア……ダメだよ！あ！先輩のシャツ、ビリって……ココア！どうして私の言うことが聞けないの！？こっちだよ、ココア！こっちにいらっしやい！」

藤枝が必死に怒鳴り続けるが、子犬の眼中に写っていない。

「大河原くん、モテモテね」

鷹取先輩はそう言うのと、ミルク少しとシロップを大量に入れたアイステイーを啜った。

「痛ててて！嬉しくねえよ、クソ！」

「ほら、ココア！こっちに来なさい、こっちへ！そっちはお客様、こっちは飼い主！ほら、ココア！こっちだよ！」

藤枝の悲痛な叫び声が、だんだんと大きくなってきた。飼い主としての面目も丸つぶれで、端から見てもムキになっているのが分かる。

「むむむむ……！」

藤枝は口をへの字に曲げて睨み付ける。

「大河原先輩！ココアに構わないで下さい！」

「ああ!?!」

思いがけない方向からの攻撃に大河原先輩は戸惑った。

「俺は被害者だろ！」

大河原先輩の言葉にやりきれない顔をする藤枝。

「そんなの分かってます！分かってますけど……納得できません！なんで大河原先輩なんですか!?!私には分かりません！」

と、藤枝は言った。

「鷹取先輩、どうしてだか分かります？」

オカルト研究部の方程式『困った時は鷹取ココロ』に従って、僕は彼女に訊ねてみた。

鷹取先輩は、恐らく僕の想像を遙かに超える、ほとんどシロップの味しかしないんじゃないかと思われるような甘ったるーいアイステイーを口に含んで、もったいぶってそれを喉に通し、そして最後に小さなため息をついた。

「……どうしてかしらね」

鷹取先輩は興味の無いことには頭を働かさない人だった。

「ほら、おいで、ココア！こっちに来たらお肉があるよ……まるで聞いてないんだなあ！こうなったら、大奮発！晩ご飯にはちよつと早いけど、カリカリもあるよ！（と、ドッグフードを握りしめ、拳を突き出す藤枝）ほら、ココア！こんなところにカリカリが山ほど……ちよつと、聞いてよ！ねえ、ココア！ココア……大河原先輩、ココアを放して下さい

ってば！ココアは私のワンちゃんなんだから！独り占めしてないで……ほら、こっちにおいで、ココア！ココア！ココア！ココアったらあ！」

憤りが胸の底を突き、ついには涙ぐむ藤枝。それでもココアは大河原先輩の元を離れない。

結局、その日は大河原先輩が逃げるように（あるいは藤枝に追い出されるように）藤枝家を後にして、事なきを得た。

もう二度とあの家には行かぬえ、と先輩はそう言っていたが、灰色ヶ原町が狭いのか、あるいは大河原先輩が暇人なのか、はたまたそういう星の巡り合わせなのか……皮肉なもので、藤枝がココアの散歩に出かけるとかなりの高確率で大河原先輩に遭遇するらしい。

もちろん、その度に藤枝は嫉妬の炎に焼かれて涙ぐみ、大河原先輩はTシャツを一枚ダメにするのだけけれど。

ピンポーン……

と、藤枝家のインターホン。藤枝の家はなかなか立派な構えで、茶色い煉瓦の敷き詰められた外壁はピカピカだし、屋根は小洒落た瓦屋根だったりする。敷地内にはちよつとした庭もあって、隅々まできちんと手入れも行き届いていて、その美しい景観が保たれている。インターホンには「今時当たり前ですよ」と言わんばかりに小型の来客確認のためのカメラがついていて、僕は思わず視線をきよろきよろさせてしまった。この一方的に見られる感じがどうしても慣れないのだ。

スピーカーを通して藤枝の声が聞こえた。

「……春日くん？開いてるよ」

「ほんと？じゃあ、お邪魔します」

ドアノブに手をかける。

ばっちり鍵がかかっている。

ピンポーン……

と、藤枝家のインターホン。

「……開いてない？」

「開いてないよ」

「ちよつと待ってね」

しばらくして、ドアの向こうからだどたと藤枝の階段を下りる音が聞こえた。

鍵を開け（チェーンまでかかってんじゃん）、ドアの隙間からひよっこりと顔を出す藤枝。怒っているような、悲しんでいるような、あるいはその両方の感情に引っ張り回されてなんとなく疲れたような、そしてまだちよつと怒り足りないような、藤枝にしては珍しいぐらい不機嫌で複雑な顔をしている。

「……どうぞ」

お邪魔します、と僕は藤枝家に足を踏み入れた。

事件の中核であるココアは、僕という慣れ親しんだ来客にしっぽだけ振って応え、小屋の中で丸くなっていた。

「大河原先輩が悪いんだもん」

と、藤枝はベッドの上で三角座りをしながらそう言った。

僕は無意識に、いや、つい出来心で彼女の太ももの裏の辺りを見てしまったけれど、藤枝は足を組んだまま膝を立てて、すっかりパンツが見えないようにガードしていた。女の子というのはどんな状況でも、はたまたどんな心境でも、そういう視線に対する警戒心だけは常に脳内リソースに割り振られているみたいだった。

僕は何事もなかったように例の事件について藤枝に訊ねた。

「……でもさ、いくら大河原先輩が悪いからって、別に殴る事はないじゃん？ていうか、あの人がいったい何をしたっていうのさ？どうせココアの事でしょ？」

「どうせとか言わないで！」

藤枝が怒鳴った。

「どうせとか言わないよ」

「言ったよ！」

「言っていないってば……とにかく、大河原先輩も悪気があってココアに好かれてるわけじゃないんだし……それに、犬のやることだもん。勘弁してあげなよ」

僕の言葉を聞いてか聞かないでか、藤枝は急に思いついたようにこう言った。

「ねえ、春日くん？自分の愛情が受け入れられなかった時に、ふて腐れる女の子と、怒鳴り散らす女の子って、どっちが女の子らしいと思う？」

僕は彼女の質問の意図が良く分からなかった。

「……少なくとも、怒鳴り散らすのは藤枝らしくないよ。頭に来たから他人を蹴ったり殴ったりなんて、そりゃ山田さんだよ」

「ちなみちゃんが飼い主だったら、ココアと仲良くできたと思う？」

「藤枝、大河原先輩の話をしようよ」

「ココアは大河原先輩に飼われた方が幸せだったのかな」

「じゃなくて」

藤枝はがっくりと肩を落とし、両膝に頭を埋めてしまった。念のためにもう一度確認してみたが、それでもやっぱりパンツは見えてなかった。

「事の発端はココアの件でいいんだよね？」

「……散歩中にココアが逃げたの」

と、藤枝はか細い声で言った。

「ココアが私を振り切って、たまたますぐそばを大河原先輩が歩いて……もう、匂いを

覚えてるんだよね。一目散に走って行って、大河原先輩を後ろから押し倒したの」

藤枝は小さなため息をついた。

「私、ココアに押し倒された事なんて一度も無いのに」

「押し倒される方もたまったもんじゃ無いと思うけど……」

「春日くん、私はココアに押し倒される努力が足りないと思う？」

知らねえよ、と僕は思った。

「私が一番辛いのはね」

藤枝は言った。

「別にココアに押し倒されないからとか、大河原先輩にとられちゃうからだとか、そういう事じゃないの。もちろんそういう事も悲しいけど……ほら、日野くんの件だってそう。私はね、私が誰かを好きになった時、いつも私の愛情が一方通行で終わってしまうのが悲しいの。まるで自分の世界から一步も出られないみたいで、『お前は一人ぼっちで遊んでるのがお似合いだ』って誰かに言われてるみたいで、これからも一生、今と同じような思いをしながら過ごさなきゃならないのかな、なんて……」

藤枝が話している最中に一度だけ足を組み替えた。

その時、ちらっとピンク色のパンツが見えた。

「分かるような気がするな」

僕がもっともらしくそう言うと、彼女は訝しげな顔をした。

「本当に？」

「うん。分かるような気がするよ」

「……悪いけど、春日くんにはそう言うの、分からない気がする」

「なんでさ？」

「だって、春日くんは誰かを本気で好きになった事なんて無いんだもん」

「そんなこと無いさ。僕だって女の子の一人や二人ぐらい好きに……」

「それは単純に、顔が可愛いから、とか、スタイルが良いから、とか、そういう事ですよ？」と、藤枝は言った。「、パンツが何色だから、とか」

僕はちらっと藤枝のピンク色のパンツを思い出した。

「ちよ、ちよっと待ってよ。僕は藤枝の八つ当たりにつき合うために来たんじゃないんだ。

そんな事言うんだったらこの辺で失敬させてもらうからね！予定もあるし」

なんとなく見透かされた気がしたので、僕はわざと怒った振りをしてみた。

「予定？」

「ああ、予定さ」

僕はちらっと腕時計を見た。昼の十二だった。

「そろそろ啓一くんと大河原先輩が馬券買って家に帰る頃だから……そうだ、良ければ藤枝も来る？」

大河原先輩の名前を聞いて、藤枝は口をへの字に曲げた。

「大河原先輩も……？」

「後腐れの無いように、きちんと謝っておいた方が良くないんじゃない？」

「……」

「オカルト研究部でギクシヤクするのは嫌だよ」

藤枝はしばらくがっくり項垂れていたが、うん、うん、と力なく二度頷くと、嫌々ながらにベッドから立ち上がったので、僕も腰を上げた。

啓一くんの住む灰色ヶ原四丁目は、藤枝の家から商店街を抜けて数十m歩いた先の住宅街にある。僕はその短い道のりの間、もう少し詳しく藤枝から大河原先輩との諍いの話を聞こうとした。けれど、何をどう聞けばいいのかさっぱり分からなくて、何の言葉が引き金になった。だとか、殴ったのはグーだったかパーだったか。（なんと、頭突きだった）とか、結局は大した話の出来ないままに終始してしまった。

「ついたよ」

啓一くんの家はいたって普通の戸建てで、真っ白い壁はその場所に何年も佇んだ名残が黒いくすみになってあらわれている。控えめに言って、中の上な藤枝の家に比べると少し見劣りするものの、どこか懐かしくて親しみの沸く家構えだった。

ピンポン……

と、インターホンを押して、僕はカメラから視線を逸らす。

「はい……あら、春日さんに藤枝さん」

スピーカーから聞こえたのは鷹取先輩の声だった。

「鷹取先輩。啓一くん、もう帰ってますか？」

「まだね。もうすぐ帰る頃だから、上がって待ったら？」

そうします、と僕は言った。

鷹取先輩が正式に日野家に養子として迎えられてから、もう半年以上も経つ。啓一くんが、「実は自分には鷹取ココロという生き別れの姉がいて、不思議な世界を介して再び引き合わせられた」なんてメルヘン話を何の気なしに（ほとんど冗談話の延長程度のつもりで）両親に話したところ、おじさんとおばさんは涙を流す程に感動し（そう言う話の大好きな両親だった）、次の日には鷹取先輩が夕食に招かれたのだった。

鷹取先輩と啓一くんの両親はあつという間に意気投合し、先輩に身寄りが無く、親類と呼べるものが一人も居ないことを知ると、両親は当然のように養子の話を進めていった。啓一くんの父親は作家の仕事をしていたが、残念ながらそれほどお金になる仕事ではなく、経済的にはかなりギリギリで、その事を知っていた鷹取先輩が最後の最後まで遠慮していたみたいだけど、結局のところ両親の熱意に押されて、また、自分の現在の境遇がいつまでも続くものではないと悟って、半ば仕方なく、半ば願ってもない形で日野家に迎えられるのだった。

とは言え、オカルト研究部にあの人の事を、日野の名字で呼ぶ人は一人も居ない。啓一くんと紛らわしいし、そもそも鷹取先輩自身、日野の名字で呼ばれると、まるで塗り立てのポストよろしく真っ赤っかになってしまふのだから。

日野家のリビングはとても静かで小綺麗な内装だった。その小綺麗さを更に感じの良いものに仕立て上げていたのは、さっき鷹取先輩の淹れてくれたとても良い香りのする紅茶だ。アツザムだかバーザムだかいう葉っぱの高いやつらしくて、僕はこんなに香りの良い紅茶を飲んだのは初めてだった。

「ここでの生活は上手くいってますか？」

僕は先輩に訊ねてみた。

「ええ、まあ、とりあえずは……」

なんでも白黒つけたがる先輩にしては、珍しく言葉を濁している。

「……ただ、啓一くんがあんなにだらしの無い人だとは思わなかったわ」

「啓一くんがだらしない？」

「ええ、とても」

僕は少し不思議に思った。

僕と啓一くんのつきあいもそれなりに長いもので、僕は彼の事ならどんな小さな事でもよく知っている（と、思う）。部屋は確かに綺麗とは言わないでも、きちんとあるものはあるべき場所に置かれているし、学校で何か忘れ物をして怒られている姿なんて見たことが無いし、おまけに、例えば僕が本なんかを貸してあげると、一週間以内にはきちんとそれを読んでちよっとした感想と一緒に返してくれるのだ。だらしないどころか、むしろ僕が知る限りではかなり几帳面な人だと思う。

「それは外向きの顔よ」

と、鷹取先輩が言った。

「内向きの顔があるんですか？」

僕が訊ねると、先輩はうんざりしたような顔つきで窓の外を眺めた。

「まず、朝が遅い。お金を借りたら借りっぱなし。部屋に入るときはノックもしない。夜遅くまで音楽を鳴らしつづける。宿題やテスト前の勉強は一日前にならないと絶対に手をつけない。三年生の六月になってもまだ進路がはっきりしない」

「家族だから警戒心を解いてる、みたいな」

「家の造りと同じように、家族にだって敷居はあるわ……一つ屋根の下で暮らす上で当然守らなければならぬルールが。血が繋がっていいよといまいと、それは同じよ。おまけに賭け事なんて……」

鷹取先輩が愚痴っている姿なんて珍しい。僕はなんとなく良いものを見た気がした。

「競馬ぐらい良いじゃないですか。それに、大河原先輩の付き合いみたいなものだし」

「自分のお小遣いの範囲内だったら何も文句は言わないわ。でも……」

言いかけて、鷹取先輩はやめた。

鷹取先輩は自分の紅茶に角砂糖を六つ（確かに六つ）入れる。

「きつと、私が甘すぎるんだわ。もっと徹底して言い聞かせないと」

「……でも、いよいよ本当の家族って感じがしますね！」

と、さっきまで一言も喋らなかつた藤枝がとっさに声を上げてそう言うので、僕はびっくりして彼女の方を見た。すると不思議なことに、さっきまで神経質にイライラしていた藤枝の表情がいつの間にかすっきり明るくなっているのである。紅茶のお陰だろうか？「なんだか羨ましいです。私なんて、日野くんが悪い部分があっても、全然良い部分しか見ようと思わないし……」

「彼が見せてないだけで、その辺が啓一くんの器用なところなのよ。人の悪い部分なんて、普通は見て見ぬふりなんて出来やしないわ。あの人はね、自分の悪い部分を隠すのがとても上手なの」

「そんな風には見えないけどなあ……」

僕がそう言うと、鷹取先輩は鼻で笑った。

「春日くん、啓一くんのお兄さんでも弟でもいいから、一度やってみたら？」

こういう話は結局のところ、当事者にしか分からない。なんて一言で帰結するのだけれど、その当事者である鷹取先輩自身がこうやって愚痴る事によって、これまでの啓一くんとの生活をすっきり見直して二人が仲良く暮らす事が出来るのだったら、それはそれで有意義な事なのだと思はう。

「そんな事より……」

と、鷹取先輩は急に困った顔つきになった。

「藤枝さん。大河原くんと喧嘩したんですって？」

来た、と僕は思った。せっかく藤枝の機嫌が直って、わざわざぶり返す事なんて無いのに……と、内心そう思ったけど、しかし、意外にも藤枝の表情は明るいままで、なんだったら全ては自分の手落ち（実際そうなんだろうけど）、自分の犯した間違いが恥ずかしくて堪らないかのようなはにかみまで見せていた。尊敬する鷹取先輩の前だからか、あるいは鷹取先輩の話に藤枝をそうさせる何か小細工のようなものがあったのか……とにかく、藤枝の笑顔がそのまま、僕はほっとしたのだった。藤枝みたいな大人しい女の子が怒ると、ある種、山田さんなんかよりも全然タチが悪いのだ。

「あの……はい……お騒がせして申し訳ありません……」

藤枝は鷹取先輩の質問に申し訳なさそうに答えた。

「ダメよ。大河原くんに悪気は無いんだから」

「いえ、仰る通りです。私が悪いんです。八つ当たりですもんね。ココアに自分の愛情が上手く伝わらないからって、大河原先輩に嫉妬して……」

「ココアは元気？」

「はい、それはもう！あの子、元気だけが取り柄なんです」

「きちんとカリカリ食べてる？」

と、鷹取先輩は訊ねた。以前、藤枝家で見ただ例の騒動を思い出したのか、鷹取先輩の口の端が微妙にゆるんでいるような気がする。もちろん、藤枝は気づかない。

「はい！もう、山ほどカリカリ食べてます！コエンザイムQ10のやつ！」

藤枝は喜々として言った。

「そう、それは良かったわね。ココアに愛情が伝わらなくとも、少なくとも藤枝さんはココアの飼い主として何一つ恥じる事なんてないのだから。きつといつか伝わるわ」

「はい……私も自分にそう言い聞かせてますけど……」

「大河原くんを殴ったのだって、自分に飼い主としての自信が足りない証拠。あなたはもつと自分に自信を持ちなさい。知ってるかもしれないけど、私は藤枝さんの事が大好きなんだから」

「え、鷹取先輩、私のこと好きなんですか？」

「ええ。妹みたいで可愛いんですもの」

「私も！私も、鷹取先輩がお姉さんだったらなああって、いつも思ってるんです。でも私は……」

と、その時。鷹取先輩と藤枝の会話を断ち切るように、突然インターホンがリビングに鳴り響いた。びくり、と体を震わせる藤枝。

鷹取先輩は黙って立ち上がり、リビングの壁に設置されたディスプレイ付きの受話器を取った。鷹取先輩は啓一くんが鍵を持たずに家を出たことをたしなめた後、リビングを出てすたすたと玄関の方へ向かった。

見ると、藤枝は顔まで真っ青にして、落ち着き無く視線をきよろきよろと動かしている。他人と喧嘩をしたことすら初めての経験だったのかも知れない彼女にとって、喧嘩別れをした相手と顔を合わすのはなかなか勇気のいるものなのだろう。

「きちんと謝って、それですっきりさせればいいじゃん」

僕が言うと、藤枝は、うん、うん、と二度力なく頷いた。

まるで我が家のような振る舞いでひよっこりとリビングに顔を出した大河原先輩だが、部屋の中に藤枝がいることに気がつくとおつと小さく唸ってばつの悪そうな戸惑いを見せた。しかし、そこは大河原先輩。すぐに気を取り直すと、まるでいつもと変わらない素振りで藤枝に言葉をかける。

「よう、藤枝。おでこは大丈夫か？」

藤枝はさっきの流れからてっきり大河原先輩に謝るものだと思っていたが、いざ本人を目の前にすると、積もり積もった様々な感情が渦を巻き、自分の中から適当な言葉を探り当てるのが難しい様子だった。

「……おでこは大丈夫です」

むっつりとした顔でそう言ったきり、謝りもしなければ大河原先輩の方を見るのもやめてしまう藤枝。大河原先輩との関係修復する絶好の曲がり角を、彼女はまんまと逆行にやってしまったのだ。

そうかい、と言ったきり大河原先輩はリビングの椅子を引き、どかっと座り込んでテレビをつけ、チャンネルをぱらぱらと回して、競馬の実況番組で画面を止めた。

啓一くんと鷹取先輩は玄関で何かを話し込んでいるのか、なかなか帰ってこない。大河原先輩はテレビを見ながら自分の馬券を確認し、藤枝は意味もなく携帯を開いてこの白々しい雰囲気から逃がっている。

……断絶。

僕は微妙な空気の漂う二人の間に挟まれて、右にも行けず左にも行けず、きりきりと神経をすり減らす一時を味わう羽目になってしまった。

謂われのない責め苦を味わい、僕はふと、意固地な藤枝を怒鳴りつけてやりたい衝動に駆られたが、彼女の自責の念にかられた真っ青な顔を見るとその気も失せた。藤枝という存在を一番持て余しているのは、他でもない当の藤枝自身なのだ。

とは言え、仲直りのきっかけなんてものは、時間と共に驚くほど急速に失われていくものなのだから……もちろんこのまま終わらせる訳にはいかなかった。

「ココアの事なんだけど……」

僕は思いきって切り出した。

「ココアの散歩コースに、大河原先輩は近寄らないっていうのはどう？」

大河原先輩は、なんで急にココアの話なんだ？とでも言わんばかりに訝しげな顔つきで僕の方を見た。今僕たち三人を支配しているのは明らかにこの件に纏わる様々な感情であるはずなのに、まるで気にしていなかった風な態度を強調しているのだ。

まったく、藤枝が藤枝なら、先輩も先輩だ。あんたまで逃げ腰だったら、話は完全に平行線じゃないか。

それとも、当事者じゃない僕には関係のない事なのだろうか？

「なんつーか」

大河原先輩が言う。

「藤枝ならまだしも、俺が道を譲る理由が分からねえよな」

僕はまた驚いた。大河原先輩の表情は、気にしていない風。などでも、あるいは逃げ腰なんかでも無く、もっと幼稚で、もっと単純なものだった。道を譲る理由が分からない？ そりゃそうかもしれないけれど……でも、そんな事を言い始めたらゴミの分別だって関係ないだろうし、優先座席だって女子専用車両だって関係ない。空気読め、というやつだった。

藤枝の引き返した曲がり角で、頑固に仁王立ちする大河原先輩を見ると、案外、この断絶の原因は少なからずこの人の私の強さにもあるのかもかもしれない……。

「そんなにココアが大事ならよ」

と、大河原先輩が続ける。藤枝はちらっと視線をあげた。

「あのバカ犬を家に閉じこめて出さなきゃいいんだよ。俺はお前の家に行く用事なんて無いし、ココアに会う用事だってもちろん無い。あんなだけ広い家なら、散歩にだって苦労しねえだろ？ もっとも、家の中はクソまみれになるだろうけどな」

僕と藤枝は二人揃って唾然とした。大河原先輩はまだ続ける。

「大体から俺あ犬つっこのが苦手なんだよ。誰彼構わずへこへこしやがってよ。自分を売り込む事に必死な姿が哀れなんだよな。なあ、春日？ ま、藤枝の場合は逆だけだな。自分の飼った犬に媚びを売って、てんでシカトされてんじゃねーか。でもって、そういうのが逆に駄目なわけ。飼い主にはビシ！ っと言われるぐらいの方が犬の方も張り合いがでるんだよ。犬なんだから」

藤枝は歯を食いしばり、胸中を荒らす様々な感情に耐えている様子だったが、今にもそれは爆発寸前で、何らかの形で堰を切る事は明らかに時間の問題だった。藤枝の携帯を持つ手が震えているのを見て、僕は思わず身震いしてしまった。

「ちよ、ちよっと待ってよ二人とも！」

僕は立ち上がり、交互に二人の顔を見る。藤枝は昂ぶった感情に今にも泣き出しそうな顔をしていたが、対する大河原先輩は意地悪そうに、そして心底楽しそうに口元を歪めて笑っていた。

「大河原先輩、どうしてそんな藤枝を挑発するような事を言うんですか！？ 藤枝も、大河原先輩がこんな人って分かってるのに、なにをそんなムキになることがあるのさ！？ 安い挑発に、安い暴力、そして安い報復行為……先輩は藤枝相手にイラク戦争でもおっぴばめる気ですか！？」

「ヤツの頭突きは大量破壊兵器、ってか？」

「だから、そういうのやめてくださいってば！」

と、ふとりビングの入り口に、今にも吹きこぼれそうな鍋の蓋を必死におさえつけているようなこの状況を、さも興味深げに、まるで他人事のように、きよとんとした表情で覗いている二つの顔を発見した。

「なに見てんだよ、啓一くん！鷹取先輩まで！」

日野姉弟は互いに顔を見合わせて、よく分からないような顔をした。

「前々から言いたい事があったんです！」

と、藤枝は日野姉弟の事などまるで気にせず、真っ向から大河原先輩に向かってそう言った。

「大河原先輩はどうして私の嫌がる事ばかり言うんですか！？私の事が嫌いなんですか！？？」

藤枝の言葉に、大河原先輩は、なはは、と笑った。

「どうしてもこうしてもねえだろ。俺がお前に嫌がることを言うのは、それはひとえにお前が弄られキャラだからさ。分かかってんだろ？それに俺はな、お前の事が大好きだから、お前の嫌がる事の一つでも言わねえと気がすまねえんだよ」

偶然にも、さっき鷹取先輩が言った言葉の断片を口にする大河原先輩。

しかし、藤枝の反応はまるで違う。

「また馬鹿にしてる！」

藤枝は椅子から勢いよく立ち上がり、怒声を飛ばした。しかし、彼女が怒れば怒る程、大河原先輩の意地悪心には火がつくらしく、何か嗜虐的な気持ちと、相手を怒らせる度に積み重ねられていくハラハラした緊張感を楽しんでいるようだった。

藤枝は感極まって、ついにはぼろぼろと涙まで零し始めた。何かとりかえしのつかない空気がリビングに流れ始めたが、僕はもちろん、啓一くんや鷹取先輩、そして当事者である大河原先輩や藤枝自身にも、恐らくこの状況をすっきり綺麗に纏める事なんて、誰にもできないだろう。

藤枝は思いのたけを大河原先輩にぶつけた。

「そうやってみんなして私を馬鹿にしなければいいんです！私はペットショップのモルモットですか！？しょせんは小ネズミですか！？狭いケージの中をこそこそ逃げ回って、誰かが近づいたら新聞紙の中に頭を突っ込んで隠れて、隙を見計らっては見窄らしくエサを食べて、そんな様を見てみんな私を笑うんだ！それが楽しいんなら、そうして下さい！私は一切に構いません！……でもね、これだけはどうか忘れないで。私だって、私みたいなどうしようも無い人間だって、これでも一生懸命生きてるんです！だって生まれちゃったんだもん、仕方ないでしょ！生まれちゃったからには、生きなきゃしょうがないでしょ！？こんなケージの、生きるのも死ぬのもままならないケージの中なら、私……ワタシ……でも、私は、それが……ううん、私だけじゃない！結局、誰一人、例外なく、みんながみんなそうなんですから！この世はペットショップのケージの中です！みんな、さよ

うなら！お邪魔しました！」

言い終えるや否や、藤枝はどたどたと、今にもつんのめって転びそうな勢いでリビングを飛び出し、逃げるように日野家から出て行った。その場にいた全員は、ぽかん、と口を開けたまま立ちつくし、誰一人彼女を引き止めることを忘れていた。一瞬の間があったのち、はっとした大河原先輩が慌てて立ち上がり、何かよく分からない独り言を呟きながら、藤枝の後を追いかけた。続いて、鷹取先輩も玄関へ駆けだした。僕もその後が続こうとしたが、啓一くんが落ち着き払って冷蔵庫から麦茶を取り出して飲んでいるのを見て、思わず足を止めてしまった。

「啓一くん、藤枝、行っちゃったよ!？」

啓一くんはなにを考えているともつかない顔つきでこっちを見た。僕たちはしばらく微動だにせずお互いの視線を交わしていたが、啓一くんは何を言うつもりも無いらしく、そんな素振りも見せないのです、僕は仕方なく彼をほったらかして玄関へ急いだ。

「待てよ」

と、啓一くんが言う。

僕は足を止めた。

「今日はやたら暑いぞ。麦茶でも飲んで行けよ」

……？

僕は首を傾げて、やはり、彼を置き去りにして日野家を飛び出したのだった。

リビングから玄関までのほんの一時、僕の頭の中に啓一くんの一言が姿形を変えてぐるぐる回っていたが、それらは玄関のドアを開けたところですっかり頭の中から飛んでいった。何のことはない、言葉は全く言葉通りの意味なのだ。

……まったく、なんて暑さだろう！

真夏並みにぎらつく太陽が、灰色ケ原の町を炙るように照らしつけ、アスファルトの焼けた臭いが陽炎と共に沸き上がってくる。朝の時点で、梅雨時には珍しいぐらい晴れやかな日とは思っていたが、これじゃまるでオーブンの中だ。

左右に広がる路地を眺めると、藤枝も鷹取先輩も大河原先輩ももうとっくにどこかへ行ってしまっていた。それどころか、僕の視界には人っ子一人の姿も見受けられなかった。立ち並ぶ小綺麗な家々だけが、炎天下の下でむっつり黙って立ち並んでいる。僕はまず最初に藤枝の家を当たってみようと、さっき来た道のりを真っ直ぐ逆に戻っていった。

藤枝の家のすぐ裏手に伸びる商店街まで数十mの道のりを、ぼんやりした頭であれこれ考える。藤枝、大河原先輩、ココア、頭突き……藤枝のおでこは堅かったのか、柔らかかったのか……少なくとも、石頭ではあるけど……いや、全く、藤枝ほど不器用な女の子も珍しいもんだ。

本来的には藤枝だって悪い子じゃない。気立ては良いし、自分で卑下するほどに頭が悪

いとも僕には思えないし（良いとも思わないけど）、そりゃ、おっちょこちよいかと聞かれればまさしく天然記念物級のおっちょこちよいなものかもしれないけれど、あるいはそれが藤枝の魅力の大部分を占めていて、彼女の失敗を一番責めているのは、他でもない彼女自身なのだから。

藤枝は藤枝なのだから、藤枝のままが良い。でも、藤枝は自分が藤枝であることに我慢出来ない。あるいは今回の件だって、藤枝は心のどこかで自分の嫌いな藤枝を脱ぎ捨ててしまったかった部分があったのかもしれない。もちろん、彼女の人生だし、そう考えるのは勝手だけど、だからと言ってそんな思いつきのような事をしたところで、そうそう人間が変われるわけも無い。おまけに、藤枝自身にそんなつもりが無くても、心の無意識が勝手に出てやってしまった事だとしたら、それは意図してやったよりも遙かに面倒で扱いにくいものだった。藤枝という人間の素地が生み出してしまった、タチの悪い、変種のおっちょこちよいだった。

全てを受け入れるとは言わない。でも、出来れば藤枝は藤枝のまま、より良い藤枝を目指して……

と、その時、僕はふと自分の周りを見回してはっとした。考え事に夢中になって、いつの間にか全く見覚えの無い路地を歩いてしまっているのだった。——人のことをおっちょこちよいだなんて言った矢先だ。

仕方なく来た道をそのまま逆に戻った。しかし、僕の良く知った灰色ヶ原の町並みは一向に見えてこず、この辺りに住んでいる人たち以外の誰にも忘れさられてしまったような、それでも誰もが見覚えのあるような、視界にあらわれるのはそんな不思議な路地だった。昭和だかに建てられた古臭い木造の民家、塀代わりに青く汚らしいトタンが建てられていて、それらを貪るように生い茂る色とりどりの草花。緑色の葉に映える赤やオレンジの南国風の花々が、ここら一体を包み込む何かむせ返るほどムシムシした雰囲気と、驚くほどにマッチしている。

歩けば歩くほどに風景は元の形相を失って行った。スチールの屋根から錆の混じった雨が流れた後が、トタン張りの外壁に茶色い汚れとしてこびりついている。ボヤかなにかで少し黒ずんだ灰色の壁は、もう何十年もそのまま放置されている。今はもう動いていない赤白青の床屋の看板。お好み焼き「美里」。年期の入った自転車に乱暴に干されたこたつ布団。屋根の修繕に使ったのか、脚立が壁に立てかけられたままの民家。壁に無理矢理押し込まれたような地蔵。明日にも腐り落ちそうな長屋。知らない家、知らない場所、知らない空気。空を見上げると、電信柱から伸びた電線だけが僕の知っているどこかへ繋がっているような気がした。

僕は判断力の鈍った頭で、ようやく自分の置かれた状況が分かり始めた。十七年住み続けた自分の町で、僕は迷子になっているのだ。

まるでダンジョンのように入り組んだ下町迷路。あっちの路地を曲がっても、こっちの路地を曲がっても、まるでループしているように同じ場所に戻ってくる。それも似た場所

ではなく、間違いなく全く同じ場所なのだ。全身を容赦なく照らしつける太陽。額からは拭いても拭いても汗が流れ落ち、いつのまにかシャツやズボンも既に濡れ雑巾みたくずっしりと水分を含んでいる。そして、誰かに道を訊ねようにも……そう、いままで小一時間歩き続けた間中、僕は誰にも、たった一人の人間にすら出会うことは無かった。数度目になるお好み焼き「美里」を見たとき、僕はふと、オカルト研究部の方程式を思い出した。

「……はい、もしもし」

携帯電話の受話口から鷹取先輩の声。

「あ、た、鷹取先輩！」

「春日くん。藤枝さん、見つかった？」

「いや……てか、それどころじゃ無くなったんです。迷子になったんです！」

「藤枝さんが？」

「いや、僕が」

「……」

電話の向こうで黙ってしまおう鷹取先輩。

僕はどうしようも無くなって、一度だけ「もしもし？」と言ってみた。

「……なに」

「鷹取先輩、お好み焼き『美里』のある路地って知ってます？まだトタン張りが多くて、南国の花々が並んだ……」

「その辺の人に聞いた方が早いじゃない」

「いえ、それがヘンなんです。誰もいないんです！人っ子一人……この路地にいるのが、僕だけなんです！しかも、路地が変に入り組んで、まるでループしてるみたいで……」

「春日くん、あなた何を言ってるの？」

「全てです！僕の身に降りかかっている、今起こっている全てを……」

「もう切るわね」

「ま、待って下さい！助けて下さい！暑くて死にそうなんですよ！」

受話口から、ツー、ツー、と言う、通話の切断音が聞こえる。

僕は携帯を握りしめたまま、ぼんやりと立ちつくした。

とにかく歩くしかないと思った僕は、この路地から、あるいはこの現状から抜け出すため、ひたすら前進する事だけを努めた。一度曲った曲がり角も、曲ってないまかり角も、時には考えを巡らせ、時には本能に任せて、やたら滅多に進んでみたのだけど、長いときは数百m、短い時なんてほんの数十mのうちに、すぐ見覚えのある場所に戻ってしまう。

おかしい、何かがおかしい。

僕はふと、この奇妙な感覚に纏わる一種の既視感（デジャブ）を感じて、ぼつんとその場に立ち止まらざるを得なかった。

既視感の正体を掴む事は、むしろ簡単だった。それは他ならぬ、去年の夏に僕を含めたオカルト研究部の面々に襲いかかった、理不尽で、忌々しい、普通の高校生には決して体験しえない、それでいて何かとてつもなく巨大で普遍的なものを感じさせる、例のIDEA界での出来事にそっくりなのだった。

しん、と静まりかえる路地。日常空間の雑音すらも聞こえない。人気の無さも相変わらずで、さつきまで味わっていたこの世にたった一人でいるような錯覚が、もはや錯覚とは言えない確信的なものに変わりつつある。

不安？……違う。恐怖でもない。それらのネガティブな感情を覆い隠してしまう程の期待感。子供の頃の秘密基地や探検ごっこに似た、³世界で僕たちだけが知っている、⁴という、あの何とも言えない密やかな興奮。僕は自分にまだIDEA入門の資格が有ったことに、肌の泡立つ程の喜びを感じていたのだった。

もちろん、こんなところ（IDEA）には何も無い。あるとすれば、人々の足下に流れるでっかい大きな川の流れのようなものが、哲学だけが存在する。僕は最初、このIDEA界が大嫌いだった。望むと望まぬに関わらず全てを暴露され、他人の前に開けっぴろげに見せつけられるこの世界に行くたび、僕は自分の中の醜い部分や恥ずべき部分の一切が天日に晒されてしまうんじゃないかといつもびくびくしていた。

しかし、それでも何度か冒険を重ねていく内、僕はこのIDEA界の本質のようなものに気づき始めたのだった。迷宮の道筋はすなわち論理的な思考の道筋そのもの、思考と行動、精神と肉体、形而上と形而下の全てがあべこべにテレコって、あそこに登場する人物の身に降りかかる出来事、または行動の全てが、人生における何らかの示唆を含んでいたように僕には思えた。また、その登場人物たちも、それぞれ何かを象徴した人選だったように思う。そして、そんな象徴的な人物に囲まれてIDEA界の訪問を重ねるある日、僕はこの⁵四次元空間の哲学⁶、がたまらなく気に入っている自分に気づいたのだった。

前述の秘密基地の感覚にも通じる、世界の秘密を体験しているのだという、優越感や到

達感にも似た何か……

と、ふと、僕は妙な違和感を感じた。——そう言えばさつき、僕は鷹取先輩と携帯電話で会話したじゃないか。

IDEA界から現実世界の人間と携帯で話す、なんてのは、誰か他人の見ている夢の中の登場人物と会話するようなもので、どだい不可能な話だった。逆説的に、携帯電話で現実世界の人間と会話出来てしまったということは、ここはIDEA界でも何でもなく、僕はやはりいい歳こいて現実世界の自分の町で迷子になってしまっただけなのかもしれない。もつとも、その携帯電話での会話そのものまでがIDEAの見せた幻覚であるとするれば、そりやもう、デカルトっぽく言っとくしか無いんだろうけれど。考えて無駄なら、あとは行動と体験だけが答えを導いてくれるのを待つしかない。と、僕はそう考えた。

本日、ついに十回目にもなるお好み焼き「美里」の看板が目に入った時、僕はくたくたにしおれきった全身を休めようと、人気のないボロボロの文化住宅の入り口から二階に伸びる階段の上に、沈むように座り込んだ。色あせたトタンの屋根がセピア色の光を通していたが、それでも直射日光よりはマシだった。

全くの無音の空間で、やたらとキンキン鳴り響いている耳鳴り。心地よい痺れがスポンジにしみこむように足の中に広がっていく。僕は大きなため息をついて、がっくりと項垂れた。あれは鷹取先輩たちとIDEAについて調べていた頃だったか……藤枝は「歩くのが好き」と言っていたけれど、やっぱり僕はそれほど歩くの好きじゃないみたいだ。

(歩くのが好き?)

と、僕は頭の中で藤枝に問いかけた。

(そうとも、君は歩くのが好きなんだろうさ。そのくせ、どこにも辿り着かない。どこにも辿り着かず、誰の心にも辿り着かず、一人で彷徨っては、けっきょく誰もいない場所で自分を見つける他ない。そうやって、君は迷子になってしまうのが、実は楽しいんだろうな。自由とか、不安とか、喪失感とか、孤独感とか、そういうのを全部引くくるめて楽しくて仕方がないんだろう。この下町迷路がそうさ！これだけの民家がありながら、人っ子一人出くわさないで、意図せず同じところをぐるぐる回る回って……そういう嗜好も分からなくも無いけど、でも、やっぱり僕はごめんだな)

僕は妙にイライラした。

(ああ、頭に来るなあ！なんだってあの子は……ああも自分勝手なんだろう！私、わたし、ワタシって……いつかの大河原先輩の言葉を嫌でも思い出しちゃうよ。自分の世界を、自分だけの箱庭世界を自分の中に設けて、その中で行ったり来たり……ペットショップのケージの中だなんて、言い得て妙さ！……もちろん、藤枝の事は嫌いじゃないけどさ。良いところも悪いところも引くくるめて、あいつは友達なもの。けど、それだけに……それだけに、どうしても腹が立って許せない瞬間がある。そんな時、相手が誰だとか、異性だからとかを超えて、ビンタの一つでもカマしてやりたくなくて……でもそれって、藤枝が大

河原先輩にやったことと同じで、結局、みんな等しく他人には苛立ってるし、みんな等しく我慢してるし、みんな等しく尊敬してるし……)

僕は苦笑いを浮かべた。

(とにかく、もう少しだけ休もう。もう少し休んで……もう一度歩きだそう。とにかく前に進む事が大事なんだ。前にさえ進んでいけば、きつとどこかに行き着くはずだ。僕は藤枝とは違うんだ。こんな迷路ぐらい、ペットシヨップのケージぐらい、あっさり抜けきつてみせてやるのさ。さあ、立ち上がろう！両足とも、まだまだへばりきつてないぞ！ただ、ちよつと喉が渴いたな……畜生、啓一くんの麦茶を飲んでおけば……自販機の一つも見つからないんだからなあ……ま、こんな人のいない路地に自販機なんて必要ないけど。でも、人のいない路地だからこそ、自販機の一つでも置いておくシニツクも悪く無いと思うんだけどな。こんど藤枝に会ったら言つてやろう……つて、僕は一体、さつきから何を考えているんだらう?)

路地を歩きながら僕は自分に問いかけた。僕は自分で思うよりも疲労していて、自分の思考を鎖で止めておく力も残っていないようだった。

(いや、あるいは……)

と、僕は考えた。

(あるいはこれは、IDEA界の特質の一つ、例の感情が引つ張られる、つてやつかもしれない……いや、きつとそうに違いない。僕は今、正気じゃないんだ。恐らく、この路地に入つてからずっと……まあ、それはいいさ。誰に迷惑をかけるわけじゃないし。だろ?……それよりも、この路地から湧き出る生活感は何んだらう?人氣が無いだけで、今にもそれぞれの玄関口わつと住人たちが飛び出して来そうな……この生活感に参加できない自分を、藤枝のヤツは楽しんでるのかもしれない。結局のところ、全部好きこのんでやつてるんだから、大河原先輩も鷹取先輩も、あんなウスノロほつときゃいいのさ!)

僕は自分の中で煮立つような毒づきを止められなかった。

(大体から、あいつのアプローチは、ゴルフのホールよりも小さいのぞき穴みたいな視野に限られたもので、僕みたいなのが声をかけても、まったく気づきもしないんだ。結局のところは、「頭突きなんてしちゃ駄目だぞ」つて、啓一くんなんかにそう声をかけて貰いたかつただけの話でさ。僕の話なんて……てんで聞きやしないんだ。うつとおしいな、藤枝も……そして、この僕も！さつきから僕は何だつてこんなに毒づいてるんだ?心の中なら、誰でも八つ裂きにしてもいいつてか?表面でにこにこしてれば、世界中の人間をおつ潰してしまつていいつてか?これだ、これこそ、IDEAでの最大の教訓の一つ……啓一くんが心の中で消してしまつた人々が、現実世界で消えてしまつたつていう、アレじゃないか。僕は自分の、安っぽい憤りに負けちゃつてるんだ。そうだ、きつとこんな考えをとつぱらわない限り、僕はこの迷路から永久に出られない。IDEAの教訓、罪と罰……罪つていうのは、現実的に形になつてならなくても、人の心の中に存在した時点で、それは完全な罪なんだ。あるいは、何か別の形で滲み出るものなんだ。でも、自分の心の中から悪意

を取っ払えるなんて、そんな芸当が可能なのは単なるおめでたい白痴野郎だけで、人間である以上僕は……でも……それでもせめて、他人を哀れんでやることさえ出来れば……)

心の中で毒づく自分と、それを冷ややかに見下ろすもう一人の自分。独りというのはこういう事なのか、なんて、妙に納得してしまった。

断絶……また断絶。

僕は、とにかく誰かに会いたかった。

気づけば僕は、体力的にか精神的にかすっかかり歩く気力を失っていて、ぼんやりと立ちつくしたまま路地を見回していた。もしこれ以上、一步でも足を前に踏み出せば、そのまま崩れ落ちてしまうような気がしてならなかった。

(たった一人)

と、僕は思った。

(たった一人でもいいから、誰か他人に会いたい。そしてもし、会うことが許されるなら、願わくばその一人は……)

と、その時。僕は奇妙な気配を感じて、ゆっくりと自分の後ろを振り返った。絵の具をでたらめに混ぜたような汚い壁の民家の、薄っぺらいガラスと朽ちかけた木で出来たガタガタの扉の下で、誰かの帰りを待つように、あるいは誰かと待ち合わせでもしているみたいに、ぼんやりと立ちつくす少女の姿があった。少女は僕とは反対側を向いていて、僕の存在には気づいておらず、また、こちらからも顔は見えなかったが、僕はこの少女の後ろ姿が誰のものであるか一目見て悟ったばかりではなく、先ほど僕が、たった一人会うことが許されるなら、と心に抱いた、まさしくその、たった一人、なのだった。

全身に電流のようなものが走って、僕は反射的に少女の方に駆け寄った。

「藤枝！」

僕が名前を呼ぶと、藤枝はぎくり、と肩を竦めてこっちを向いた。その怯えきった表情を見ると、さっきまで胸の奥で煮立っていた毒々しい何かが一瞬にして中和され、一切の罪が免除されたような気がした。あれほど罵倒していた藤枝の全存在を肯定し、塞いでいた気分も一気に有頂天に駆け上った。そんな衝動を、ありありと、形にしてしまえそうなほどに感じたのだった。

他人への哀れみ、が自分の中の罪を償う唯一の方法なら、藤枝こそ、このモルモットのようなちっぽけな少女こそ、僕たちみんなが、許される、きっかけを作ってくれる、最も愛するに足る人物なんじゃないだろうか。——鷹取先輩だけじゃなく、大河原先輩までもが彼女を「大好き」と言った意味が、ようやく分かったような気がする。

怯えた藤枝は、一、三步後ろに下がったが、僕はあまりに嬉しくなって、構わず藤枝に抱きついた。しかし、その時の藤枝の抵抗は凄いもので、僕は襟首を引っつかまれ、藤枝を軸にぐるんと180度振り回された挙げ句、遠心力をそのままに投げ飛ばされ、近くに止めてあった自転車に背中から突っ込んだ。激しい音と共に僕の体が自転車の下敷きになっ

てしまうと、藤枝はびくびくしながらこちらを観察していたが、しばらくすると彼女は恐る恐るこつちへ近づいてきて、覆い被さった自転車をどけてくれた。

「……説明して！」

と、藤枝は顔を真っ赤にして言った。

「どうして抱きついたのか、説明して！」

僕はよろよろと立ち上がりながら、「ごめん」と呟いた。

藤枝は腰に手をあて、足を開き、精一杯威厳を保とうとしているようだった。

「春日くんのそういう人懐っこいところ、嫌いじゃないけど、私だって一応は女の子なんだから……気分だとかテンションだとか、そんなので抱きついたりするのは違うと思うな！これが山田さんだったら、海に向こうまで蹴り飛ばされてるんだから！私ね、日野くんの家から飛び出して、右も左も分からずに走ってたら、変な路地に迷い込んで、迷子になって……どうしようもなくふと誰かに会いたくなって……そしたら……って、聞いている！？（僕は口元に抑えきれない笑みを浮かべ、激しく何度もうんうんうん、と頷いた）聞いてないでしょ、絶対！私、怒ってるんだからね！」

「藤枝は僕が出してやるよ！」

と、僕は言った。藤枝は面食らったらしかった。

「こんな場所、いつまでも居るべきじゃないのさ」

「こんな場所って……この路地？そりゃ居るべきじゃないよね。でも、どうやって……？私、ここで二時間以上も迷ってるんだよ？私ね、ここ、多分普通じゃ無いと思うの。ひよつとすると、IDEAに関係した……きゃっ！？」

藤枝の言葉が終わらぬうちに、僕は藤枝の足と背中をそれぞれ抱え、いわゆるお姫様抱っこ状態で抱え上げた。大飯食らいの藤枝にしては、重くもなく軽くもなく、女の子の重さなんてのはこんなものなんだろうな、なんて想像していた通りの重さだった。

もちろん、藤枝は抵抗した。それはもう、必死に抵抗した。耳まで真っ赤にして、じたばたともがき続けて、ひっぱたきすらされたけど、それでも僕の方は彼女を下ろすことはしなかった。

彼女の罵声を……ピーピー鳴くモルモットののような罵声を聞こうともせず、何か確信的なものに引っ張られるようにして、僕は路地を真っ直ぐに突っ切った。「美里」を抜け、南国の植物が特徴的な一角を抜け、でかかど「小包郵便一斉値下げ！」の張り紙が貼つてある（値下げは去年の話だった）ポストを素通りすると、またもや初めて見る路地へたどり着いた。

路地には写真の撮影所があり、ディスプレイには明治かそこらの厳めしい顔つきをした陣羽織を着た老人のモノクロ写真が飾ってあって、国元クリニック、国元整骨院（家族で経営？親子？どうでもいいけど）があって、民家の前にずらーっと並ぶ、通行の邪魔にすらなっている、発泡スチロールを鉢にした色とりどりの草花があって、ネコよけのペットボトルがあって、シャッターを閉じきった薬局があって、で、それらの景色が流れる

ように過ぎ去って……ついには、車の音、ネコの姿など、何か本当の生活感のようなものが蘇り始めてきた。

元々の疲労もあって、いい加減、藤枝を抱える腕に力が入らなくなってきて、危うく彼女を落つことしそうになってしまった。僕は踏ん張るように藤枝を抱えなおした。僕の顔には何か鬼気迫る薄笑いのようなものが張り付いているらしく、彼女は僕の顔をじっと見ながら、不安で不安でどうしようもないみたいだった。きつと、頭がヘンになってしまったと思っているに違いない。でも、藤枝のそんな様子の全てが……頭のおかしい友人に抱きかかえられてガタガタと震えるその姿が、僕には楽しくて楽しくてしょうが無いのだった。

「……き、訊いて良い？」

藤枝は僕に抱えられながら、猛ダツシユで運搬されながら、恐る恐るそう訊ねた。

「ぜえ……はあ……ひ、一つだけ、なら！」

僕は息も絶え絶えそう答える。

「ひ、一つ？二十ぐらいあるのに……えつと……じゃあ……春日くんは、頭がヘンになっちゃったの？」

「普通だよ、多分！」

「でも、さっきからヘンだよ。抱きついったり、こうやって抱っこして走ったり……いつもの春日くんじゃないよ」

「じゃあヘンになっちゃったんだろ！」

「春日くん、私、一人で歩けるから」

「好きにさせろってんだ！」

「でも……あれ？」

と、その時。急に視界が開け、でっかい団地やコンビニ、横断歩道……そして何より、休日を満喫するまばらな人の姿を発見したとき、僕は思わず息を飲み、足を止めた。僕と藤枝はついに、あの下町の迷路を抜けて、僕たちの住む灰色ヶ原に帰ってきたのだ。

興奮のあまり、僕は藤枝を下ろす事も忘れたまま、また、藤枝も抱きかかえられた事を忘れたまま、しばらく町の景観に釘付けになっていた。太陽は相も変わらず強烈な日差しを浴びせ、道行く人々は王子とお姫様の突然の登場に面食らって、ちらちらとこつちを伺っている。そして、しばらくぼんやりとしていた藤枝が、やつと晒し者にされている羞恥心に気づいたのか、きやつ、と小さい悲鳴を上げた後、先ほどにも増して激しく抵抗を始めた。——それら全ての画が僕の中の何か琴線のようなものに引っかかり、僕はおかしくておかしくて仕方が無くなって、気がつけばげらげらと神経質な高笑いを上げていた。ぎよっとする通行人と青ざめる藤枝。彼らの反応がまたおかしくて、僕は一層大きな笑い声を上げた。

堪らなくなった藤枝は、地面に落っこちるのも気にせず、身を振って僕の手元から逃げ出した。そして、地面に転んだまま、本当に正気かどうか確かめるような、訝しげな顔つ

きで僕の方をじっと見上げた。続いてふらふら立ち上がると、僕の方から目を逸らさず、二、三步後ずさって、僕に追いかけるような素振りが無いことを見て取ると、彼女は一目散に逃げ出した。僕の方でも、ここにきて驚くほど藤枝に興味を無くしてしまっていたので、あえて追いかけるようなマネはしなかった。今日はこれでいいや、と僕は思ったのだ。

顔から例の薄笑みは消せそうも無く、ちょっとした拍子にでも吹き出しそうになっていたので（どうも、興奮が飽和状態になってしまっているみたいだ）、僕はちらりと辺りを見回して、間違いなくいつもの灰色ヶ原であることを確認すると、さっさと自分の家に戻ることにした。啓一くんの家に戻って藤枝の件を伝えるべきだろうか？でも、冷静に筋道立てて話せる自信は無かったし、そもそも彼らの誰かに会いたい気分でもなかった。理由なんて特に無いけれど、とにかくそういう気分だったのだ。

興奮冷めやぬまま、目の前に伸びる長い横断歩道を渡って、灰色ヶ原四丁目の方へ行こうとしたそのとき、僕は誰かに、ぽんぽん、と右肩を叩かれた。嫌な予感に思わずくりとする。恐る恐る振り返ってみるとそこには、鷹取先輩や大河原先輩や、あるいは啓一くん以上に会いたくない人物が、僕をよく知るあの人物が、もの凄く怖い顔をしてそこに立っていたのだった。

「……今の、なに？」

と、山田さんが訊ねた。

僕は自分の不運を呪った。

「今のって？」

「今のやつよ。百合花ちゃんに何してたの？」

何もしてない、と僕は答えた。他に何と答える余裕も無かった。

「じゃあ何よ、あの抱っこ」

「抱っこなんてしてないよ」

「いや、見たんだけど」

「何を？」

「往來のど真ん中で女の子抱っこして、馬鹿笑いしてるアホを」

「してないよ」

急激に冷めやむ興奮。気がつけば、まるで高波の落差のように、僕の気持ちはしよげかえっていた。

山田さんは黒いラインの入ったオレンジ色のジャージにジーンズ、そしてグリーンのパーターのバッグという、彼女らしいといえれば彼女らしい格好をしていた。大学とか行きだして、黒縁の眼鏡なんてかけ出したらむかつくな、と僕は思った。

「山田さん、どこ行ってたの？ 買い物？」

「いや、私、見たんだからさ」

と、山田さんは僕の言葉を、完全に、無視して続けた。

「とりあえず、事情を話して、風呂上がりのコーヒー牛乳みたくすつきりさせてよ。ホント言うと今すぐにもあんたの耳引つつかんで百合花ちゃんのとこに連れてって謝らせたいんだけど、状況次第では考える余地も残されてるかもしれないし……とにかく、さっきのは何だったの？悪ふざけ？」

山田さんはイライラしながら、それでもなるだけ落ち着いて、僕から正直な答えを引き出そうと努力している様子だった。

「何だったのかが分からないのよ、何だったのかが」

山田さんがそう付け加えた。何だったんだろう？と僕は思った。

「とりあえず……」

と、僕は切り出した。

「僕は藤杖を救ったんだ」

うんうん、と山田さんは頷いた。

「……それだけ？」

「それだけ」

「本当にそれだけなのね？」

「それだけだよ」

山田さんは僕の耳を引つつかんで、ずかずかと横断歩道を渡り始めた。

「ちょ、ちょ、ちょつと、ちょつと待って！ちょつと待ってよ！」
僕は慌てて叫んだ。

「どこに連れてくのさ！」

「百合花ちゃんの家が決まってるでしょ」

と、山田さんは当たり前のように言った。

「馬鹿！そんなの、僕は行きたくないし、藤枝も来て欲しくないって！何をそんなお節介……い、痛い痛い痛い！耳がちぎれる！」

「二枚もあるじゃない」

「人の耳を何だと思ってるんだよ！コレクションでもしてんのか！？それに……山田さんは分かんないでしょ、僕と藤枝の間に何があったとか、なかったとか！当事者の僕にもさっぱり分からないんだ、きみに分かるわけが……ちょ、痛いよ！まず耳を放してよ！」

山田さんは訝しげな顔つきで僕の方を見ていたが、しばらくしてむしり取るように手を放した。耳からは焼けるような痺れがしばらく消えなかった。

「痛ったいなあ、もう！」

「春日くん、良い？」

と、山田さんは妙に優しくそう言った。

「百合花ちゃんは私の友達だから、場合によっちゃ絶対に容赦しないからね。あんたにどんな趣味があってもそれはもちろんあんたの勝手だけど、百合花ちゃんにちょつとでも変なことしようとしたら、ホントに、五秒で殺すから。それだけは肝に銘じておいて」

「僕はもう二度と藤枝を往來のど真ん中でお姫様抱っこしたりしないよ」

「よし。春日くん、一つ賢くなった」

山田さんは満足そうに頷いた。

「それに、僕だって藤枝の友達だもん。親友って言ったっていいさ。僕は別にあの子に悪意があつて……（私の方が親友だつーの！と、山田さんは怒鳴った）……悪意があつて、あんな事をしたんじゃないんだ……とにかく、取るに足らない事だよ。抽象的な話さ。日常の清算だったんだ」

「そんなの、カラオケでもヤケ食いでも何でもいいじゃん」

「それじゃストレス発散だよ。そうじゃなくて、もっと……」

「馬っ鹿馬鹿しい」

「そうさ。馬鹿馬鹿しい話さ」

「……とりあえず、私お昼食べてないから、カフェでサンドイッチでも食べない？」

「いいね。僕もサンドイッチ食べたかったんだ」

「牛丼でもいいけど」

「馬鹿言っちゃいけないよ！サンドイッチにしよう」

「じゃあサンドイッチで」

山田さんの肯定によって、僕たちは近くのカフェに入った。思えば、彼女と二人きりでこんな店に入るのは初めての事かもしれない。しかし、僕は緊張もしなければ、ときめきもしなかった。

カウンターでコーヒーとサンドイッチを買って席に着くと、山田さんはサンドイッチ片手にしばらく携帯をいじっていた。誰かへのメールか、スケジュール確認か、今月の予算計画か……今更失礼だなんて思う仲じゃないけど、同席している僕に対して全く気を遣っていないのか、あるいは気にもかけていないのか。彼女は彼女で気難しい人だから、僕にはさっぱり分からなかった。

山田さんは携帯を閉じると、サンドイッチを一口頬張って、コーヒーを胃に流し込んだ。その間、何かもの問いたげな顔で僕の目をじっと見ていたが、なかなかどちらも言葉を切り出さなかった。次に発する言葉の内容を吟味しているのか、あるいはレタスとトマトの新鮮さを堪能していたのか。

「……度が過ぎているのよ、度が」

と、山田さんは言った。

「感情吐露もけっこうだけど、もう少し常識的に考えて行動しようよ。もし人生が常識って名前のカーリング・ゲームだったら、春日くん、酷いもんだよ」

彼女の言葉に、僕はうんうんと頷いた。

「アリストテレスが大切にしろって言ったもの、知ってる？」

僕は山田さんに訊ねた。

「紫外線対策？」

「いや、中庸さだよ。バランス良いのが一番だって」

そりゃごもつとも、と山田さんは言った。

「でも、僕は違う気がするんだ」

僕は言った。

「バランスが良い人生って、良い相手と結婚して、子供を作って、良い仕事を見つけて、良いお給料を貰って、適当に趣味もこなして、休日には子供を野山の公園に連れて行ってキヤッチボールして……とどの詰まり、退屈ってことでしょ？別に煮立った鍋の中に手を突っ込むようなことが素敵な事だとは言わないけど、全てが中庸に上手くいきすぎて、退屈すぎる。のは、ぜんぜん中庸じゃないじゃん？アリストテレス自身の言葉と矛盾してるじゃん？」

「アリストテレスに訊きなさいよ」

山田さんはつまらなそうに首を横に振った。彼女はこういう話題に興味の無い人だったが、あいにく僕はこんなどうでもいい人生論が大好きだった。

「春日くん、理系に進んだんだっけ？」

「うん」

「計算とか方程式みたく、哲学とか思想じゃ人生の問題は解けないと思うよ」と、山田さんは言った。その通りだと僕も思う。

「だから藤枝を抱っこしたんだよ。元氣の出るおまじないさ」

僕が言うと、山田さんは苦笑いを浮かべた。

「馬鹿ね。あれのどこがおまじないなのよ」

「僕の中ではおまじないだったんだよ」

「そんな勝手なおまじないがあつてたまるもんですか」

「なんだよ。じゃあ、おまじないにルールがあるのか？十字を切るのだって、陰陽師の呪法だって、痛いの痛いの飛んでいけ。だって、最初は誰かの思いつきだろ？」

「かもね」

「だったら、僕が藤枝を抱っこして町を駆け回っても、それはおまじないとして成立するんだよ」

「おまじないとしての、説得力に欠けるのよ、春日くんの抱っこは」

「効果は絶大だったんだ、説得力がなんだってんだ！あれのお陰で僕と藤枝はあの下町迷路から抜け出せたんだ。否定しようのない事実だぞ」

「下町……なに？」

「下町迷路だよ！僕は……たぶん藤枝も、さっきまであそこですつと迷子になってたんだ。歩いてても歩いてもぐるぐるぐるぐる回って、なんかIDEAっぽい……いや、あれはまさしくIDEAそのものだったんだ！きみの言うとおり計算や方程式じゃ解決できそうに無い問題だったのさ。だから、僕は僕の直感に任せて、僕のやりたいようにやったまでさ。壊れたテレビの頭をぶっ叩くみたいだね。そして、曲がりなりにも事はそれで解決したんだ。畜生、後になってそんなちくちく言われちゃ、恥ずかしくってかなわないなあ！」

「羞恥心は残ってるんだ？」

くすつ、と山田さんは笑った。何か馬鹿にした笑い方だった。

僕はムキになって言葉を続けた。

「……じゃあ、なんだよ。カラオケ？ヤケ食い？それも悪くはないだろうさ！でも正直な話、僕たちは一緒に映画行ったり、ゲームしたり、テレビ見たり、カラオケ行ったり、ショッピングしたり……たったそれだけの間柄じゃないでしょ？もっと、根っこの部分で引きちぎれない関係のはずだよ。仲良く昨日のテレビの話をして楽しんだり、チャート一位の曲の話をするのも、決して悪くはないけど……」

僕はちよつと考えて、言葉を続けた。

「例えば、山田さんが誰か人生のパートナーとして理想の相手を見つけたとしても、春日

とか、藤枝とか、日野とか、鷹取とか、石神とか、そういう名前にはまた違う響きがあるはずさ。全てがうまく行き始めて、今後アリストテレス的に人生が退屈になってしまふ事だつて、そりゃ、大いにあるかもしれない。でも、僕たちがIDEAに絡んだ去年の数ヶ月は、人生のエネルギーが最も眩しく輝いていた瞬間の一つの象徴として、これからさき何年も何十年も胸の奥に残ってるはずだよ。僕たちはいざというとき、人の素地の部分で対話出来るんだ。それなのに、ヤケ食いだなんて！」

山田さんはサンドイッチを頬張りながら僕の話聞いていた。必要以上に身を入れず、かといって否定もせず、「この人はこういう考え方なんだ」と、どこか割り切ったような表情をいしていた。しかし、話が進むにつれて彼女の表情から見る見る興味が失われていくのが見て取れたので、僕は適当なところで話を切り上げることにした。一緒に哲学を語る相手としては、彼女はあまりに実際的な人なんだと思う。石神先輩や藤枝のようにはいかなかった。

僕が話をやめてしまうと、二人の間に沈黙が流れた。お互いにテーブルの上のサンドイッチも食べ尽くしても、もう一つ立ち上がる気になれない。気まずい沈黙じゃあ無いけれど、なんとなく空虚な時間が過ぎていく。僕と山田さんはまるでお互いの事をすっかり忘れてしまったように、ぼんやりと外を眺めていた。

道行く人々が流れていく通り。知らない顔、顔、顔。なんかベーカーリーでオールド・フアッションを手取る品の良い格好をした爺さん。バスの停留所で女子高生が四人固まって笑っている。駐禁の切符を切る若い警官。でっかいヘッドホンをしたドレッド・ヘアのラスタな兄ちゃん。噴水には、二組のカップルの姿がこちらから伺える。一組は倦怠期を迎えているのか、一言も話さずにぼんやりと鳩を眺めて、もう一組は……

もう一組は、僕の知っている顔だった。

「大河原先輩……それに、百合花ちゃん！」

山田さんも見つけたらしい。彼女はびっくりしてそう言った。

藤枝の言う言葉に大笑いする大河原。藤枝も満足そうに笑っている。その様子には、つい先ほどまでのぎこちない雰囲気はかけらも見受けられない。

僕と山田さんは慌ててカフェを出て、二人の方に近づいた。噴水までの短い道のりを早歩きで突っ切ったので、何度か誰かに肩をぶつけたけど、僕の意識は完全に二人に釘付けだった。

僕と山田さんが近づいてくるのに気づいて、大河原先輩と藤枝はちょっと驚いた顔をしたが、その反応は仲の良い友人を偶然町中で発見した以上のものでは無かった。

「よう！凸凹アベック」

そりゃあんたらだ、と僕は思った。しかもアベック。

「こりゃ一体どういう事ですか!？」

僕は先輩に訊ねた。

「馬券が当たったからよ、藤枝の奴に電話かけて『今日のお詫びに好きなもん奢ってやる』

って言ったたら、この野郎、ホイホイ出てきやがった。簡単なもんだろ？」

大河原先輩が言うと、藤枝はなぜか得意げな笑みで頷いた。

「春日くん。これぞ、人の素地での対話。ってやつよね？」

ぽんぽん、と山田さんが僕の背中を叩いて皮肉った。僕は脱力した。

「で、百合花ちゃん、なに奢ってもらうの？」

「ホテルがらんどろ、にあるパフエ・バイキングだよ。ゆずとワサビと抹茶とさくらんぼのアイスクリームでお城を作るんだ」

「和風な城だよな。本丸は何だっけ？」

「八丁味噌アイスです！」

藤枝が笑顔で答え、大河原先輩と山田さんは大笑いした。さっきカフェから見たときに先輩が笑っていたのも、恐らくはこの件だろう。

「難攻不落だぜ。江戸時代にそいつが建ってれば、日本は未だに鎖国中だったろうな。ペリ―も真っ青になって回れ右だろうよ」

大河原先輩と山田さんはしばらくそのまま笑い続けていたが、ようやく余韻が冷めてきたところで、藤枝は僕の方を見て訊ねた。

「春日くん達もどう？今日は大河原先輩の奢りだよ」

「待て待て待て！なんで俺がこいつらまで面倒見なきゃいけないんだ？俺がこいつらに奢る義理はねえよ。俺が当てた馬券はせいぜいお小遣い程度の小銭で、お前に奢るだけでもう十分に赤字さ」

「啓一くんは外れたんですか？」

僕は訊ねた。

「いや、あいつは当たんねえ。いつも当たりっこない超大穴馬券を一枚だけ買って、既に勝った気でいやがんだ。自分だけはそれでも勝つと思ってんだよ。とんだ王様だぜ！」

啓一くんらしいな、と僕は思った。

「あいつの金だ、そりゃ、勝手にすりゃいいさ。馬鹿だとは思うが、いちいち口を出しやしねえよ。あの潔さも買うしな。でもな春日、一回あいつが馬券買うところを見てみるといいぜ。あの確信に満ちあふれた、野心的な目を見る度、俺は笑いを堪えるのに必死になっちまうんだ。まったく、おかしな奴だよ。人生を舐めてるようにも見えねえが……まあ、奴は基本的にツイてるからな」

と、その時、僕たちの会話を裂くようにとつぜん携帯の電子音――どう〇つの森か何かの曲だった気がする――が鳴り響いた。藤枝が自分のポケットに手を突っ込んで、いそいそと携帯を取り出した。

「はい、もしもし。鷹取先輩？はい、今、大河原先輩と広場で話し込んでたら、偶然山田さんと春日くんが……え？啓一くんですか？はい。啓一くんが一体……」

ぎよっとする藤枝。

僕たち三人は顔を見合わせた。

「え！？……馬券が当たって……に、に、二十万円！？はい、はい、分かりました！パフェはキャンセルします！……ええ、構いません。全然構いません。私ですか？私はいつでもスタンバイOKです！みんな？みんな、スタンバイOKだよ！？（僕たちは領く他無かった）大丈夫です！はい、はい……はい！よろしくお願いします！それでは！」

藤枝は携帯を切っても、しばらく放心状態でディスプレイから目を離さなかった。僕と山田さんと大河原先輩は彼女が話出すのを待っていたが、藤枝がぼんやりとして一向に話し出さないのを見て、もどかしさに耐えかねた山田さんが「どうしたのよ」と彼女に訊ねた。

藤枝ははっと我に返って言った。

「啓一くんが二十万円の馬券を当てた！」

僕と山田さんはびっくりして思わず顔を見合わせた。ただ、大河原先輩だけは「馬鹿にしゃがって！」と、一人でいきり立っていた。

「それで？それで？」

「それで、啓一くんが『これを更に全額次回のレースに賭ける』って言い出したんで、鷹取先輩が必死に貯金するように諭しつけたらしいです。でも啓一くんは『余計な金は持ちたくない』って……」

「資本主義社会ナメてんじゃねえよ！」

「で！鷹取先輩があんまりうるさく言うもんだから、啓一くんが『それならみんなでカニでも食べに行こう』って」

来たああ！と、山田さんが叫んだ。広場に広がる、一際大きな声だった。

「でも！でも！先輩曰く啓一くんの心が揺れてるのは目に見えて分かるらしくて、出来ることなら彼の気の変わらない内に早く来てくれってことです！」

大河原先輩は迷い無く立ち上がった。

「よし、ここから一番近いのはどの道だ？」

「そっちの路地ですよ！ダッシュで行きましょう！」

と、山田さんが指したのは、僕と藤枝が散々迷った、例の下町迷路の出口の方向だった。僕たちは思わず顔を見合わせた。またあの路地を通るなんて、例えその先にカニが山盛り置いてあっても、僕は絶対にごめんだった。

「そ、そっちのアーケードの道を通って行こうよ！」

僕はわざと遠回りになってしまいう道を指し示した。

訝しげな表情の大河原先輩。

「……てめえはカニが嫌いなのか？それとも俺たちが嫌いなのか？」

「違うんです！迷うんですよ、そっちは！今日、僕と藤枝は散々……」

「ああ。灰色ヶ原三丁目の路地だろ？」

大河原先輩は言った。

「あそこは道自体が細くて見渡せないし、おまけに観葉植物がジャングルみたいに生い茂

って、どこも似てて見分けがつかねえからな。曲がりくねってて迷路みてえに分かり辛えが、けっきょくのところは一本道にいくつも小さなループ状の路地がくつついてるって寸法さ。さあ、ほら、行くぞー！」

「でも、僕は今日、確かに……」

「この暑さだ、判断力が落ちてたら迷子にもなるさ！心配しなくても、俺はあの道をしょっちゅう通ってるから大丈夫だ！」

僕はぼかん、と口を開けてもう一度例の路地を眺めた。僕が体験したループは、似た場所が多いとか、複雑に曲がりくねってるからとか、間違いなくそんな陳腐な錯覚なんかじゃ無かった。それとも、それも大河原先輩の言うとおり、判断力が落ちた、故の幻覚だったのだろうか？

考えていると、大河原先輩はうんざりして言葉を続けた。

「なあ、春日！頼むから俺にカニ食わせろよ！日野の気まぐれはてめえも知ってるだろ？今もしこの瞬間にテレビにACかなんかのCMが流れでもしたら『全額をアフリカの子供達のワクチンに』って言い出す大馬鹿野郎だ！そりゃ、そいつはさぞ立派な金の使い方かもしれないけどよ、そういうのはいつでもカニが食える奴がすりゃいいんだよ！もしてめえがカニアレルギーなんだったら、寿司でも豚しゃぶでも懐石料理でも何でも良から！」

「高級中華料理でもですか？」

「こつてり油ののった北京ダックと、なんとかウイルスのくそワクチンと、てめえはどっちが喰いてえんだよ！？そら、走るぞー！」

僕たち四人は大河原先輩に続いて灰色ヶ原三丁目の下町迷路めがけて、全速力で駆け出した。大河原先輩と山田さんはもちろん、今日は散々疲れたはずの藤枝も、どこにそんな力が残っていたのか、体育の授業でも見せたことのない見事なダッシュを見せている。それどころか、つんのめってよろけた僕の腕を引っ張り上げて、「ほら、しっかりー」なんて言うのだ。彼女がこんな言葉を他人にかけるなんて、滅多に無いどころか、ひよっとすると生まれて初めての事かもしれない。

なるほど、ヤケ食いも悪くないかもしれないなあ、と僕は思った。いや、あるいは哲学なんてものは、ヤケ食いが出来ない腹癒せ以外の何ものでも無いのかもしれない。

そう、空想のパンケーキでは決してお腹を満たし尽くす事なんて出来やしない。それは単なる自己満足とか、逃避とか、それ以上のもものではあり得ないのだ。パンケーキを頭の中に思い描いたなら、僕は本当はレシピを持って、材料をかき集めて、キッチンに向かわなきゃいけないのだ。山田さんが実際の過ぎる人間だったら、僕はあまりにも空想的過ぎるのだった。

でも……と、僕は思った。

でも、それがパンケーキなんかじゃなくて、材料もレシピもあり得ない、例えば、空想

の人物、だとしたら？イメージから抜け出す事の許されない、空想の人物に恋してしまっただら？

そう、まさしく、IDEAで出会ったような……

「大丈夫？春日くん」

藤枝が心配そうに僕の顔を覗き込む。僕はいつの間にか例の路地ですっころんでいた。

「ほら、早く起きないと。先輩たち、行っちゃうよ！」

藤枝の手を借りて立ち上がり、僕はもう一度走り出した。

先輩たちを追いかけて走っていると、僕は突然、お腹が空いてお腹が空いて仕方が無くなってきた。

……とにかく今は走るしかない。走るしかないんだ。

考えるのは、その後でしょう。

と、僕はそう思ったのだった。

(完)